

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	基調講演 両大学の社会貢献課題としての記憶の重要性
Author(s)	ヴェッセルス, ヨハネス
Citation	ぶらくしす , 23 : 11 - 15
Issue Date	2022-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/52228
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052228
Right	
Relation	



基調講演

ヨハネス・ヴェッセルス（ミュンスター大学学長）

訳：金田瑞樹

越智学長、
講演者の方々、
同僚と学生の皆様、
紳士淑女の皆様、

このたび、「記憶」をテーマにした合同ワークショップで、特に「ミュンスター大学における社会貢献課題[学術知の社会還元]と記憶の重要性」についてお話できることを嬉しく、光栄に思います。このたびは、都合がつかず越智学長のご講演中に途中退室させていただき、大変申し訳ございませんでした。パンデミックの状況の進展のため、私は州の学長会議と地域の危機管理委員会に出席しなければならなかったのです。

さて本題に戻りまして、「両大学における社会貢献課題と記憶の重要性」に焦点を当て、まずミュンスター大学が社会貢献課題をどのように理解しているかをご紹介しますと思います。

私がミュンスター大学の学長になってからもう 5 年以上が経ちます。この学長室の構成について最初に検討し始めた 6 年前の時点で、ミュンスター大学では「学術知の社会還元」あるいは「第三の使命」とも呼ばれるものについての新しい理解を発展させていかなければならないことが明らかになりました。国の法律では、研究と教育のほかに、学術知の社会還元が大学の重要な任務の一つとなっています。伝統的に、社会への還元は明らかに研究の経済的利用を指向していました。そのため、技術の社会還元に重点が置かれていました。しかし現在では、市民社会に対する責任という意味でより広範に理解するアプローチとっています。それは、イノベーション、パーティシペーション、サイエンス・コミュニケーションという三つの言葉で特徴づけることができます。

このワークショップの共同主催者の一人であり社会貢献担当の献身的な副学長である私の同僚、ミヒャエル・クヴァンテ教授を通して、これらの新しい範囲で、私たちはミュンスター大学が理解する社会貢献についての発信に取り組んでおりますが、彼自身から後にご挨拶があると思います。ミュンスター大学学長として、私たちは社会還元を大学の戦略の主要な柱とすることを目標に掲げています。すなわち現在、イノベーション、パーティシペー

ション、サイエンス・コミュニケーションという三つの側面から、独自の社会貢献戦略を策定しているのです。

ミュンスター大学は、知識の創造とその社会への還元を市民社会に対する責任の一部、そして社会の進歩の原動力と考えています。大学の研究に携わる科学者たちは、絶えず知識を生み出し蓄積しています。そして、私たちの研究のほとんどすべてが 公的な資金によって成り立っている以上、その成果を外部に発信（communicate）し、社会が適切に参加（participate）できるようにする義務があると思います。それがうまくいって初めて、社会で、そして科学のレベルでも得られた知識が十分に活用されるようになるのです。そこで大学は、科学的営為の国際的な道德基準に従って、知識の生成者、知識の集約者として自らを位置づけ、積極的に挺身しなければなりません。それは自称専門家や機関に対抗するために、自らを差別化し主張するためでは決してありません。科学に対する信頼と科学的知識の価値を生み出す手段として、大学では社会還元の一環としてサイエンス・コミュニケーションを行っています。私にとってはこの信頼と価値こそが、事実と単なる意見を明確に区別し、民主主義社会で情報に基づいた意思決定を行うための根幹をなすものです。だからこそ、大学は科学性あるいは学識というものを学生全体の態度として発展させ確保する必要があると私は強く思うのです。

これは、例えば世界の気候に関する決定が複雑化していることを見れば明らかです。それらは未来の世代や決定の過程に関わっていない国にも影響を与えることがあり、単純な答えでは済みません。

このような複雑な決定には、科学がどのように知識を生み出し、政治がどのように決定に至るかを十分に理解することが必要です。大学は何度も何度も科学的な手法やプロセスを説明する必要があります。そうしてこそ、社会ひいては政治が科学を受け入れることを期待できるのです。このような取り組みにおいて重要な役割を果たすのは、教員養成教育を受ける学生たちだと考えています。彼らがこの世代を超えた態度形成のプロセスを最もうまく社会へ移転させることができる人たちなのです。

ミュンスター大学では、研究と教育と並ぶ重要な取り組みとして社会還元を位置づけています。私たちの知識（私たちの知識と言いますが、本当は社会の知識）を使って、公共の議論に積極的に参加、「介入」し、複雑な決定において政策担当者に助言をすることが私たちの任務だと考えています。

では私たちはどのように社会と関わっているのでしょうか。

私たちは、四つの博物館（聖書博物館、地質学博物館、考古学博物館、植物園）を持っていることをとても誇りに思っています。これらの博物館を利用して、一般の方々にさまざまな形式で最新の科学研究に触れていただいています。このようなことができるのは、ミュンスター市の中心部にある私たちの博物館が市のほかの博物館と近接しているおかげです。私たちの社会還元活動のもうひとつの重要な側面は、科学的プロセスそのものへのオープンな参加を通じて、この信頼を獲得することです。ここでは市民科学という言葉がキーワー

ドになりますが、この言葉は慎重に使わなければなりません。私たちが理解する市民科学とは、大量の集積データ、例えば fitbit ブレスレットや個人の携帯電話からのデータを受動的に提供することではありません。むしろ、人々が研究プロセスそのものに直接参加することなのです。

どういうことかと言うと、具体的な例を挙げて説明するのが一番わかりやすいでしょう。その代表的なものが、ミュンスター大学の行動生物学の研究者たちによるものです。彼らは、犬の飼い主が日常生活の中で観察したペットの行動を記録するための特別なアプリを開発しました。そして、これらの観察結果は、実験室条件下での動物の観察結果と比較されます。これらの観察で見つかった違いは、行動科学における再現性の危機の真相を突き止めるための鍵となるでしょう。

参加することのもう一つの重要な側面は、私たちの社会還元の理解における双方向性の概念です。例えば、「科学と実践の出会い」というモットーのもと、学界と実践者の間の交流を活性化し、時事的でしばしば非常に実際的な問題に対する解決策を共同で生み出すことを目的としたプロジェクトを明確に支援しています。これこそ、私たちが社会還元を双方向と表現するときを考えることです。

さて、ここまで「社会還元」という概念についての理解を述べてきましたが、「記憶」というテーマについてはほとんど触れてきませんでした。しかし、まず知識の社会還元に関する我々の基本的な理解について紹介することが重要でした。私は、市民科学と社会に対する責任について触れ、これらが技術移転という古典的な社会還元よりも実により大きなものであることも述べました。

この点で、歴史を生きたままとどめるという意味での記憶の役割は、特に適切なトピックであると思われます。

ミュンスター大学は、学生数 45,000 人を超えるドイツでも有数の総合大学で、長い歴史と伝統を誇っています。この長い伝統と歴史には当然ながら記憶があり、残念なことにそれは好ましいものだけではなく、その一部は重大な不義不正によって特徴付けられます。私たちの歴史には、あまり輝かしいとは言えない時代の記憶も含まれているのです。

国家社会主義時代は、この歴史の中ではかなり新しい部類に入ります。生きている証人がほとんどいない現状を鑑みると、第三帝国における国家社会主義政権の残虐行為を、他の形の証言によって記憶にとどめることは非常に重要だと考えています。

ミュンスター大学の場合、第三帝国時代に引き起こされた不義にはさまざまな方法で強制された国家によるものも含まれます。また、ミュンスター大学には加害者と被害者がいました。ドイツの歴史のこの部分においてはしばしば起こりうるように、被害者は自分たちの運命をわずかさすら思い出してもらったことも、不当な扱いを受けたことに対する補償を受けとることさえも、21 世紀まで待たなければなりません。私は、他の形の証言によって記憶を生きたままとどめることについてお話ししました。特に価値ある例が、フーベルト・ヴォルフ教授のワークショップ講演で紹介されることになっています。そこで、ここでは

もっと小規模なプロジェクトに注目していただきたいと思います。ミュンスター大学では、2015年に国家社会主義の犠牲者に尊厳と敬意（face）が払われ、このプロジェクトでは、ある意味で声も与えられました。2015年11月から12月にかけて、「廊下での会話」と題したインスタレーションにより、国家社会主義時代に姿を消した人々が短期間大学に戻り、廊下や架空のオフィスのドアの前で彼らについてオープンに「会話」したのです。教授、職員、学生たちが国家社会主義によって、さらにはミュンスター大学によってさまざまな形で破壊された自身の人生の物語を語るのです。私にとっては、新しい追悼の方法が発見された非常に印象的なプロジェクトでした。

この展示に続き、2018年にはミュンスター大学で行われた不義によって大きく損なわれたそれらの個人史を110人の伝記でたどった本が出版されました。私たち読者は、1052ページ以上にわたって、状況を変える手立てがあったかもしれないこと、少しの市民の勇気さえあれば犠牲者たちの悲劇的な伝記を大きく変えることができたかもしれないことを知ることができます。

この出版プロジェクトで本当に特別驚くべきことは、歴史学と政治学の学生以外に「中高年学び直し課程」からの、（つまり、定年退職後に入学した学生）の参加者がいたことです。これは、私たちが市民科学と呼ぶものの優れた一例だと思います。

ミュンスター大学の歴史をさらに一歩さかのぼると、必然的に「Westfälische Wilhelms-Universität（ウェストファリア・ヴィルヘルム大学）」という名前を与えたヴィルヘルム2世に行き着きます。

1907年以来、ミュンスター大学は当時の創設者である皇帝ヴィルヘルム2世の名前を冠していますが、この大学の名前には非常に問題があります。ヴィルヘルム2世は軍国主義者で、民族主義者でありました。歴史家が示すように、彼は反スラブ的であり、異常とも言えるほどに反ユダヤ的でした。ヴィルヘルム2世の反ユダヤ主義は、同時代の多くの皇帝をしのぐものでありました。彼が主要な一員であったホーエンツォレルン家は、第一次世界大戦前のドイツの拡大植民地政策、第一次世界大戦の勃発、南アフリカにおけるヘレロ族とナマ族の大量虐殺に大きく関わっていました。この影響力のある一族は、ドイツ全土に反ユダヤ主義の風潮を敷いたのです。

大学の学術元老院やその委員会では、人物としてのヴィルヘルム2世や名付け親としての彼を何度か扱ったことがあります。直近では、2018年に設置されたワーキンググループが「ミュンスター大学におけるヴィルヘルム2世への歴史的責任あるアプローチのためのコンセプト」を策定し、2020年に発表しました。これに基づき、私たち学長室は私たちの名前の由来について批判的な検証を開始し、さらに大学の歴史における他の問題ある人物（元学長も含む）を批判的に再評価するための包括的な措置の目録について決定を行いました。現在実施されている多くの方策（展示、討論会、掲示板、パンフレットなど）は、学術的なコミュニケーションと記念行事を、私たちの歴史のこの部分と折り合いをつけられ

るように組み合わせたものです。このプロセスの主な成果は、大学創立 250 周年に向けて閲覧可能となり発表される予定です。

まとめとして、古典的な理解である技術革新と、最近の発展であるパーティシペーションやサイエンス・コミュニケーションといった観点から、社会還元の基本的な考え方や私たちの理解をお伝えできたのではないかと思います。最後になりましたが、このワークショップの企画と実現に貢献されたすべての方々に感謝いたします。特に、広島大学大学院人間社会科学研究所と、後藤弘志教授が所長を務められる応用倫理学プロジェクト研究センター、そして私たちの哲学講座と歴史・哲学学部の皆さんに感謝したいと思います。

最後になりましたが、このワークショップで興味深く刺激的な議論が行われることを祈念しています。私は、この非常に重要なテーマについて、世界的に持続可能で斬新なアプローチがなされることを期待しています。さらに、両大学間の関係が永続的かつ深化することを期待し、言うまでもなく、そう遠くない将来ここで皆さんと直接お会いできることを切に望んでおります。

ありがとうございました。